

来週の聖霊降臨節(ペンテコステ)に備え、今日は「聖霊」について思い巡らせ、心を整えておきたい。三位一体の「神」と「キリスト」は何となく分かるが、「聖霊とは何ぞや」と幾人かに尋ねられた。

聖霊とは、ふいに風として吹き、神の恵みを私たちの現実に起こす働き。神の何たるかは分からなくても、御心の経験なら自覚できるのではないかと、とお答えした。すると質問者は、ますます怪訝な顔になった。

「ここであなたがたに言っておきたい」とパウロはぐぐっと迫り、念を押すように語りかける。「神の霊によって語る人は、だれも〔イエスは神から見捨てられよ〕とは言わないし、また聖霊によらなければ、だれも〔イエスは主である〕とは言えない(1コリント 12:3)」。これも「聖霊とは何か」の答え。

「イエスは主である」と告白しうるのは、私たちに宿る聖霊の働き。なんと、欠け多いこの「私」と聖霊は不可分であるらしい。人間イエスの言葉やふるまい、十字架で「私のために」死なれたこと、死から復活されたこと。これらに心が開かれる時、聖霊との融合が明らかになる。

静かな、淡々としたこの奇跡を信じるのは、熱心さや感性からではない。「聖霊によらなければ」この告白はありえず、イエスの業に何か感ずるところがあるなら、あなたにおいて聖霊が微動しているのではないかと。

聖霊が与えられる者と、与えられぬ者がいるのではない。聖霊は敬虔への褒賞ではないのだから。「あなたがたは悪い者でありながら、自分の子供には良い物を与えることを知っている。まして天の父は求める者に聖霊を与えてくださる(ルカ 11:13)」とイエスは言った。

十字架で赦されぬ罪はない。それほどに愛されているがゆえ、どんな悪い者にも聖霊が与えられる。ところがユダは、自分の悪と十字架の赦しを比較し、自分の悪の方が勝るものとした(マタイ 27:4~5)。なんと馬鹿な、軽率な。どんな裏切り方をしようとも、他の使徒のごとく赦されるのに。神の愛より、自己愛を優先してしまった。

これが罪。十字架の赦し、神の愛、聖霊の力を値踏みすること。恵みには感謝するが、これくらいかと想定すること。赦されているに、自分を赦さないこと。いったいどちらが神なのか。

「聖霊の冒瀆は赦されない」というイエスのきつい口調は(12:31~32)、宿る聖霊とあなた自身を侮ることへの警告。

「神よ、わたしの内に清い心を創造し、新しく確かな霊を授けてください(詩編 51:12)」。詩人は、自分に働く「神の霊」と、自らの主体性が不可分なことを知っている。

「御救いの喜びを再びわたしに味わわせ、自由の霊によって支えてください(51:14)」。救いを経験し、未知へ踏み込む意味も分かっている。それゆえ、自分の願望から外れたとしても、自由に吹き抜ける「霊」が開く未知に期待する。

キリストの救いは霊の風、吹き抜けていく聖霊の自由こそ、私たちにとっての真の主体性なのだ。

聖霊降臨の直前、ユダに代わって使徒の任務を継がせるために(使徒 1:25)、条件に合った二人の弟子から(1:22)一人を選ぶことになった。どうやって選んだか。多数決でも、権威者の判断でもない。皆で祈り(1:24)、「くじ」で決めた(1:26)。

「くじ」、ジャンケンと同じだが、120人(1:15)の祈りは響き合い、聖霊によって、粛々と「マティア」が選ばれた(1:26)。選挙よりも「くじ」。いいじゃないか。



《おまけのひとこと》

聖霊とは偶然 偶然に見えるなら それでいいではないか どこから来て どこへ行くか分からないほどに自由なのだから(ヨハネ 3:8) 私たちの明日も来てみなければならない 聖霊が吹くごとくに